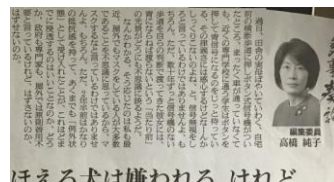


道徳的な不自由さ

朝日の高橋純子・編集委員の多事奏論は、いつも考えさせられることが多い。9日の「道徳的不自由さ ほえる犬は嫌われるけれど」を途中から紹介する。

「健康的で清潔で、道徳的な秩序ある社会の不自由さについて」



著者は精神科医の熊代享さん。いまの日本は「清潔で、ほえる犬は嫌われるけれど健康で、安心できる街並みを実現させると同時に、そうした秩序にふさわしくない振る舞いや人物に眉をひそめ、厳しい視線を向けるようになった」と指摘し、こんなふうに結論している。

「私たちは、通念や習慣の奴隷になってはいけない」「法制度の枠組みを遵守し、(人々に特定の行動を促す) 空間設計に覆われながら暮らすことと、それらに盲従し、何も考えなくなることはイコールではない」 そうなのだ。何も考えなくなることを、私は恐れるものである。

先月 24 日、経済再生担当相を事実上更迭された山際大志郎氏を取り囲んだ記者の腰の低さは、いまこの「時代」を象徴しているようで、さまざま考えさせられた。「辞任される理由について伺ってもよろしいでしょうか」「首相とはお二人でお会いになりましたでしょうか」山際氏が「はい」と答えると、質問した記者は「ありがとうございます。いったい何に対するお礼なのだろう？」

首相会見でも、質問する記者の「丁寧なあいさつ」がじわり広まり、習慣化しつつあると感じる。まさにコロナ対応の「空間設計」により、指名された記者がスタンドマイクの前に進み出るスタイルになってから目につく「よろしくお願いします」、まれに「お疲れさまです」。私とて一対一のインタビューでは「ありがとうございます」を連発している。しかし、問いを重ねることを封じられ、次の予定があると打ち切られてしまうような会見では不要だろう。記者は権力を監視する番犬である。丁重派が大勢となれば、ほえる犬が異常視され、礼を失している、道徳に反していると檻に入れられることになりかねない。

「道徳は習慣だ 強者の都合よきものが道徳の形にあらはれる」(夏目漱石が手帳などに記した「断片」)

善良なるひとびとは無意識のうちに道徳を内面化する。だからこそ、ジャーナリズムが踏ん張らないといけないと思うのだ。権力や同調圧力と対峙する姿勢を、意識的に示し、内面化された「当たり前」に小さなつぶてをぶつける。ただ従うのではなく、ともに考えましよう。ほえる犬は嫌われる。しかし、ほえない犬しかいなくなった社会はたぶんもう終わっている。

(2022年11月13日)